

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取組分野：【食】、【知的財産】

1. 都道府県、市町村 香川県内^{うちのみちよう}海町
2. 事業者名 株式会社 ヤマヒサ
3. 取組みの名称 島産オリーブ増殖による地域活性化
4. 取組概要等

概要

醤油醸造業(株)ヤマヒサは、平成元年に収穫木用オリーブ栽培を始め、平成15年に「小豆島・内海町オリーブ振興特区」第1号認定後、特区法人となり、平成17年に認定農業者となった。最初の頃はオリーブの果実を利用して塩蔵漬け(小豆島の方では新漬けという)や果実に含まれるオイルを搾ったオリーブオイルの販売していたが、また、台風による果実の落下等、毎年の収穫量が大きく変動するため、農業経営としての難しさを感じていた。また、オリーブは実が成り始めるのに4~5年かかり、経営的収量を確保するまでには植えてから約10年を要することから、栽培の維持管理費に係る投資が大きな負担となっていた。

そこで、果実以外に年間を通じてコンスタントに収益を上げるために、オリーブの葉が年に何回も芽が吹くことから、オリーブ茶の製造にチャレンジした。オリーブの葉には、カルシウム、トコフェロール、ポリフェノールを多く含んでおり、ポリフェノールの一種であるオレウロペインは血液の酸化を防ぎ、コレステロール値や血糖値を低下させるなどの効果があるといわれている。なお、オリーブの葉は非常に苦味があることから、これを抑えるのに苦労した(特許取得(平成16年10月1日)「オリーブ茶のティーバッグおよびその製造方法」)。

活動の規模

項目	H12	H13	H14	H15	H16
生産量			330 ^{リットル} 1,200kg	550 ^{リットル} 2,800kg	660 ^{リットル} 3,200kg
解説	(上段)オリーブオイル(下段)オリーブ茶				
売り上げ			2,400 5,000	5,000 8,300	6,600 15,000
解説	(上段)オリーブオイル(下段)オリーブ茶(千円)				
イベント回数	5	5	5	5	5
解説	県内における地域物産展・FOODEX等				
イベント参加者	150,000	150,000	150,000	150,000	150,000
解説	県内における地域物産展・FOODEX等(人)				

活用している地域資源

オリーブ

オリーブの栽培は、明治41年(1908年)に当時の農商務省が三重県、鹿児島県、香川県の3県を指定して試験栽培したのが始まりとされ、瀬戸内式気候でオリーブの栽培に適した香川県(小豆島)のみが経済栽培に成功した。

オリーブは香川県の県花・県木、小豆島の島花・島木、さらには内海町の町花・町木として選定され人々に親しまれており、島の貴重な観光資源、地域の特産物である。

昭和39年の全盛期には130ha(小豆島全体)あった栽培面積が、農産物の輸入の自由化やみかん作への転換等により激減していたが、農業・食品産業・観光業発展のため、内海町では平成10年度よりオリーブ振興を図っており、現在では、栽培面積にして約20ha(内海町)、約2万本のオリーブが植栽されている。

従来のオリーブ製品としては、果実を利用した塩蔵漬け(新漬け)やオリーブオイル等があるが、近年はオリーブオイル配合の化粧品などが注目を集めている。また、最近では果実だけでなく、オリーブの葉を利用してオリーブ茶も製造されている。

地域活性化のポイント

内海町は瀬戸内海国立公園に浮かぶ小豆島の東部に位置し、人口は約1万2千人の海と山に囲まれた自然豊かな町で、気温は平均15度前後、年間の降水量は1,200mmの温暖少雨のいわゆる瀬戸内式気候でオリーブ栽培に適している。農業の規模は零細であり、複雑な地形の中、生産条件が不利な上に過疎化・高齢化が進み、担い手不足から遊休農地が増加傾向にある。

しかしながら、小豆島の貴重な地域資源であるオリーブを地元企業(特区法人)が自ら、オリーブ栽培に取り込むことにより、遊休農地の解消とともに景観保全及び環境美化を図っている。また、農業のみならず、オリーブを増殖することにより、名実ともに「オリーブの島・小豆島」につなげ、島の観光面においてもオリーブはその一役を担っており、地域の活性化の大きな原動力にもなっている。

事業の今後の展開方向

当社は平成15年に特区法人、平成17年には認定農業者となり、今後とも耕作放棄地を中心に農用地を積極的に借上げ、経営規模の拡大を目指すとともに、オリーブの果実だけでなく、枝葉も含めた農産加工品の研究開発や自社産製品(有機栽培による農薬不使用栽培)の販売など、農業の6次産業化により、農業経営の安定化を図るとともに、新たな雇用機会を創出するなど、地域に貢献する企業を目指す。

遠い将来、200年後、300年後には、オリーブ栽培がここ小豆島にとどまらず、四国や中国地方の瀬戸内海沿岸にまで拡大し、その中で小豆島がオリーブの研究開発の中心として、また、オリーブのことなら何でも分るなど、情報発信基地となるよう願っている。

